

史料館だより
第10号
1987・10・10

特集・魚屋道五周年

編集 大國 正美

発行 神戸・深江

生活文化史料館

〒653 神戸市東灘区深江本町3-15-7
電話(078) 453-4980

魚屋道と出会って

史料館理事
マッスイ大学講師 田辺 真人

私が初めて「魚屋道」という地名に出会ったのは、中学の生物クラブに属し、蝶やカタツムリを採集するため六甲山中を歩きまわっていた時だった。六甲山の登山地図に、神戸市の東南の一隅、東多福山の南方にこの名があった。大西雄一著「六甲山ハイキング」や山下道雄著「新しい六甲山」が、当時の愛読書で、その中に、この道が灘地方と有馬との交易ルートで、六甲山最高峰の南、住吉川の源流に石造りの立派な本庄橋があること、この橋のたもとで、交易の市が開かれたことが書かれていた。ちょうどそのころ、親子づれのハイカーが本庄橋付近で遭難し、丸一日ほどして無事救出されたニュースが新聞紙上をにぎわしたのが印象に残っているが、中学・高校時代にはこれ以上魚屋道につきあうこともなかった。

大学で西洋史を専攻していた私に、郷土史や民俗研究のきっかけを与えてくれたのは、当時大学生で子供会の世話をしていた立住隆典君という友人だった。子供たちに須磨区大手町の歴史を教えてくれるというのである。この街は私の母の一族が多分中世か

ら住み続けてきた土地で、史学科の学生然としていた私だが、この時、この街かどの歴史については一言も発することができなかった。困った私は神戸市史資料室を訊ね、ここで落合重信先生に出会い「歴史と神戸」と出会った。ちょうどその頃、兵庫高校時代に日本史を教わった名生昭雄先生の「西小部の民俗」を読んで、とても興味を覚え、同じ方法で「大手村小史」をまとめた。こうして関学大を卒業して県立芦屋高校の先生となった頃から、神戸地方の歴史を勉強することになった。

芦屋高校に勤めた年の三年生に馬場弘幸君という山岳部員がいて、よく山の話をし山歩きをした。彼は東灘区森の出身で、稲荷神社の地車曳きの祭りや魚屋道の伝承を伝えてくれた。中学時代に出会ったこの山道が郷土史の研究対象として私の頭に浮かんだのはこの時だった。ちょうどその頃、神戸市の民俗芸能調査が始まり、東灘区を担当した私は、土地の古者からお祭りや芸能とともに魚屋道に関する口碑をたくさん採集することができた。ことに郷土史にも深い関心を持っておられた保久良神社の故猿丸

武勇宮司から、いろいろな示唆を受けた。文献に關する知識も少しづつ増え、六甲についての案内書の原点ともいべき竹中靖一著「六甲」を読む一方、芦屋市史史料編の中に、魚屋道という名こそないが湯山間道の名称で、この山越え道についての史料を見出したのも、その後まもなくのことだった。

ちょうどその当時、神戸新聞に街道をたどる連載があり、西国街道などとともに魚屋道がとりあげられた。当時社会部の橋川真一さん佐久川昌彦さんと写真部の永田照夫さん、漫画家の丘あつしさんと奇妙な一団を組んで有馬まで、汗をかきかき歩いた。この連載がのじごく文庫として刊行されたのが昭和四十九年。史料や口碑や地名・古地図を集めて、遅筆の私が「歴史と神戸 一〇八号」に「魚屋道の往来」を載せたのが昭和五十六年だから、郷土史を勉強しはじめて約十年、この道を歩いていたわけである。それで、史料館で歴史的催しをしようということになった時、深江に起点を持つこの歴史の道を見なおす催しを提案したわけである。

鴨越道や天王谷道などともに、この魚屋道も六甲を横断して北方の山里と海辺の人々とは往き来した生活史の道である。このような道があるきながら、地域の生活の背後にある歴史を、身近に感じ考えていただきたいと思う次第である。

史料館では、田本庄村史を編集中であるが、その作業の中で魚屋道にまつわる新しい史料が収集されている。これについて、本号で、望月浩氏が紹介しているが、一歩一歩魚屋道の研究が進んでいることは、とてもエキサイティングである。

魚屋道あるきながら——コースガイド——

(1) 深江〜登山口

有馬温泉と灘地方を最短距離で結ぶ魚屋道。この道の深江側起点、阪神電車深江駅の北側に魚屋道の碑が建てられています。昭和五十七年、深江財産区によって建立されたこの碑は「有馬まで三里」の文字が刻まれており、さながら昔の道しるべ。ここから約十二キロに及ぶ歴史ハイキングを始めましょう。この碑のある道「稲荷筋」をまっすぐ北へ向かって歩き国道二号線を渡ったところに昭和二年建立、高さ五・八メートルの朱鳥居があります。鳥居の横には「稲荷之社 従是三町」と刻まれた道標も建っています。JRのガードをくぐり、さらに阪急電車の線路を越え、先程の道標の指示どおり森稲荷神社に着きます。

入口の古びた手水鉢に「深江村・魚屋八良兵衛・浜屋清三郎・魚屋庄兵衛」などと刻まれているので注意して見てください。

森稲荷神社

霊亀元年（七一五）卯月卯日の夜、深江の浦の沖に光るものが現れ浜辺に流れ寄った。村人が近づいてみると、それはミコシであった。すると「われは稲荷の神である。この山の辺へ祀れば村々を守ろう」とお告げがあったので、現在の地に祀ったのがこの神社の起りだと伝えられている。海からあがられた場所は深江の踊り

松の地とされ、村人が喜んで踊りまわって神様を迎えたから、踊り松の名がついた、と言われている。
（社伝・摂津名所図絵より）

ここで道中の無事を祈願。そろそろ坂がきつくなってきました。甲南女子大学と森の山の神を左に見ながら、宮川と呼ばれる川づたいにいよいよ山道に入ります。

(2) 蛙岩〜風吹岩

山道に入ってしばらくは、水害によって本来の道筋が崩れてしまっている箇所。急斜面や沢づたいの道、魚屋道最初の難関です。歩きづらいのを我慢して登ってゆくと、やがて大きな蛙岩が見えてきます。その名の通りカエルがすわっているような形の岩ですが、狼岩とも呼ばれていたようです。また、しばしば大蛇がこの岩に巻きついていたりという目撃談から蛇巻岩と名付けられた事もあります。この岩を過ぎると次は山の神にお参りしましょう。

山の神

春に山から下りて田の神になり、秋には稲を実らせ山に帰ってゆく、という山の神は東灘の村々ではひろく信仰されてきたものであった。魚屋道から少し右へ入る小径の奥に深江の村人が信仰した山の神の祠が残っている。安政五年（一八五八）正月の文字が刻まれてあり、一月

四日にお祭りをしたという。現在でもこの辺りは字「山の神」の地名で呼ばれている。

岡本・保久良神社からの登山道と合流し、すれ違うハイカーが多くなると前半行程の目標地点風吹岩に到着します。ここでちょっと休憩。四本の登山ルートの集合点、たくさんの人が思い思いに景色を眺めています。東南の方角には日本の近代登山発祥の地ロック・ガーデン。北には七右衛門富士の伝説を持つ荒地山、岩椅子を望むことができます。汗がひいたら再出発です。

(3) 雨ヶ峠〜七曲がり

有馬の朝市に魚を届けるには真夜中に深江を出発しなければならなかったそうです。そんな魚屋さんに関する伝説も残っています。

魚屋道の狼

ある夜、一人の若い魚屋がトボトボと暗い山道を歩いていた。すると何やら着物をひっぱるものがある。見れば若者がいつも余った魚を与えていた山犬であった。仕方なくその山犬のひっぱる方へついてゆくと、そこは大きな岩陰であった。若者がその岩陰に入った途端、大きな狼の群れが山道を通り過ぎてゆくのが見えた。

こうして狼をやり過ぎた若者は「いつもの魚のお札に狼から私の身を救ってくれたのか」とそれからも余った魚を山犬に与えてやり続けたという。（市民のグラフこうべ47「伝説の六甲山系」より）

風吹岩を過ぎて歩いてゆくと左手の茂みの向こうに二つの池があります。これが横池と呼ばれた江戸

時代から使われていた灌漑用池です。登山道に近い方が雄池、それより奥の池は雌池です。またこの道沿いに「水ノミ場」の地名も残っており、昔はそこに清流があつて、のどをうるおしたのでしょう。他にも字「畑の場」は尾崎藩の奨励によって開墾が行なわれようとした場所、と言われています。文化二年（一八〇五）、「畑の場」の再開墾問題が持ち上がり、当時の史料が残っています（本庄村史資料編第二巻参照）。

道は芦屋カントリークラブゴルフ場を横切る辺りから再び急坂になってきます。風吹岩から一時間あまりかかって坂を上りきり、雨ヶ峠に到達します。ここではかわいイノシシの親子に出会えるかも。振り返って眼下の景色を見るもよし、イノシシと遊ぶのもよし。少し休憩したら下り道、東お多福山の美しいススキを見ながら本庄橋へ向かいます。

雨ヶ峠を下ったところで西からくる住吉道に合流し、住吉川に沿って北へ歩いた小さな広場がかつて本庄橋がかかっていた場所です。この橋の付近はかなり広い河原であり、昔は有馬と灘の人々の物資交換の場であつたと伝えられ、この本庄橋も有馬と東灘の交通がさかんだった時期に本庄の村々の人によって掛けられたものなのでしょう。しかしこの石橋も昭和五十年頃のある日、自然崩壊してしまい石材の一部も流出してしまつたので、その代りに広場を作り、橋の由来を書いた説明板を設置し、橋石を置いて昔の姿をしのばせています。

さあ砂防ダムを越えたら、いよいよ七曲がり。魚屋道登山のハイライトです。かなりきつい事は確かですが、今迄の道程で山道慣れしてしまい、案外ス

イスイ登ってゆく人も。山頂から下りてくる人に励まされながら、くねくね登ること四十分。土の道がいつの間にか舗装された道に変わっている事に気付いたら、もう山頂は目前です。

(4) 六甲山頂へ有馬

深江を出発して約五時間あまり、ようやく六甲山頂、一軒茶屋に到着します。六甲最高峰は標高九三一・三四メートルで現在は米軍無線中継所が置かれていて立ち入る事はできません。ドライブウエーを注意して横切り、あとは一時間程の下り道だけです。射場山をひざを震わせながら下りてゆき、木々のあい間から温泉の湯けむりが見えてくると、やがて目的地の有馬に到着します。登山道の終点にあたる地点に毎日新聞社によって建てられた石柱があります。

六甲山頂上二到ル 三七二六メートル



住吉二到ル 一二四一三メートル

という字が刻まれています。これと同形態の石柱が阪急六甲駅の南側に立っており、六甲山頂を中心として表側（灘）と裏側（有馬）から山頂への距離を示しています。この辺りの谷は昔、炭酸ガスが噴出していた場所であり、近づいた鳥や虫が次々に死んだ、というので地獄谷と呼ばれています。その炭酸ガスが発生していた穴は鳥地獄・虫地獄として形だけはとどめており、昔は有馬の名所の一つになっていました。

こうして無事、有馬にたどり着きました。バスで帰るか、電車で帰るか、それとも温泉に入って汗を流してゆきますか。

（文・山本文雄／絵・伊東玲子）

荷着場としての畑の場の開発

史料館研究員 望月 浩

一、はじめに

今年も十月十日体育の日に、史料館友の会主催の行事として、「魚屋道を歩く会」が行なわれる。老若男女数百人が、深江から六甲山最高峰を経て、湯の町有馬へと下って行く。六甲を東西に行く「六甲縦走」が有名であるが、この六甲山を南北に横断するこの行事もだんだんと定着してきた。

今でこそハイカークの通る道筋であるが、かつては深江の浜でとれた魚を有馬へ運んでいたという。そのため「魚屋道」と呼ばれていた。

だが、この道も近世には、「湯山間道」と呼ばれ生瀬・小浜などの宿駅と論争をくり返してきた。この論争の歴史の様子は、田辺真人氏が「魚屋道の往来―近世東六甲の山越え交通史―」（歴史と神戸）No. 一〇八、昭和五十六年十月一日刊、に所収。後に昭和五十七年十月十日、深江財産区管理会より抜刷、復刊される。）で詳しく論述している。

本文は、田辺氏の了解を得て「魚屋道の往来」を踏襲しながら、本庄村史資料篇第二巻に収録している。

【26】 街道荷継場開発につき返答猶予の願書

【27】 街道荷継場開発願書

【28】 街道荷継場開発につき願書

を新たな史料に用い、近世における魚屋道をめぐる

人々の様子を書き進めて行きたいと思う。

二、正徳の駅法改正前の論争

近世に入り、慶安年間（一六四八〜五二）頃になると、諸物資の流通状況が活発になってきた。そこでこの荷物をめぐって、各地で紛争が起きてきた。

寛文十二年（一六七二）に、生瀬（西宮市）・西宮・小浜（宝塚市）・小屋（昆陽、伊丹市）・伊丹の馬借たちが、湯山間道の通行の禁止を大坂町奉行所に出願している。

元来、灘地方から有馬へは、芦屋・西宮を通り、北へ向かって生瀬・舟坂を通るか、昆陽・小浜を通り生瀬・舟坂を通っていた。（この西宮から直接生瀬へ行く道筋と、小浜を通り生瀬へ行く道筋で論争が行なわれた。）

だが、灘地方と有馬を結ぶルートとしては、大きな回り道である。そこで、六甲山を直接越える山道が利用されるようになったのである。しかし、この山道を利用されると、生瀬等宿駅側にとっては大きな打撃となるので、通行禁止を訴えた。

だが、正徳の駅法改正の前であったので、宿駅側は「新儀迷惑」と唱えるだけであった。

やがて元禄期（一六八八〜）になると、海上交通も発達し、蔵米・酒荷物・商人荷物・百姓荷物・干

鰯荷物をはじめ、塩・魚類などの日常消費物資の在郷諸村への積送りがますます活発になってきた。こういった交通事情の変化の中で、幕府は正徳元年（一七一）に駅法の改正を行ない、①往還でない勝手道通行の禁止。②「正徳の元賃銭」と呼ばれる御定め賃銭を定めた。

これにより、小浜など宿駅側からすれば湯山間道は違法な交通路となったわけである。

三、天明年間の紛争

正徳の駅法改正で決められたのにもかかわらず、間道通行は続けられた。天明六年（一七八六）に、本庄九ヶ村（森・深江・青木・三条・津知・北畑・中野・小路・田辺）が、同年夏の大雨で破損した湯山間道の修復を決めた。そして、六甲の北方への荷物の運搬に使う牛の数を村毎に決めている。だが、これはすでに駅法改正で勝手道の通行が禁じられているため天明八年（一七八八）に灘の青木浜から湯山（有馬）への往来の事実を見つけた宿駅側の商人の糾明で差し止められた。

しかし、その後も有馬への湯治客がふえるにつれて日常諸物資の消費もふえた。それにつれ、湯山間道は拡張・整備され、旅人・物資を通行させていた。

四、畑の場の開発

文化二年（一八〇五）八月二十九日に、森・三条・津知・中野の庄屋から、尼崎藩の役人に畑の場の開発の申請が出された。この畑の場というのは、東お

多福山の南麓一帯で、現在ではゴルフ場一帯である。また、本庄から有馬までの直線距離にして約1/2の地点である。

「本庄山之内字畑之場と申処、凡百ヶ年余ニも相成候哉……右畑之場と申処ニ山平御座候二付、御地頭より御見立ニ而、新開畑御座候処、如何様之義ニ而出来不申候」

と、本庄山内の畑の場という所が、百年余前に領主の見立で開発をしてみたが、なぜか完成しなかったと述べ、

「当村より五、六町程東北ニ相当り、北畑村と申より有馬通路之山路御座候而、至而細道御座候処、凡式拾年以來折々道造いたし、当時は、少々宛荷物之候ハ、三田井在郷より牛馬之通路も相成候而、追々は当辺へ出荷物も到来可申」

つまり、北畑村から有馬へ通じる山道がある。これは細い道で、二十年前から時々道を造り、少しの荷物の往来を行なうことができた。なお、この山道にもつと手をかければ、三田や近辺の村々からの牛馬の通路になる。ゆくゆくは、ここらあたりへ着く荷物も出てくる。そして、

「此度新開畑受奉願上候。御開濟被成下候ハ、右出荷物新開畑之処継ニも可相成。左候得ハ助精も御座候ニ付、追々は人家も出来可申義ニ存候」

と、この度の畑の場の開発の願いを聞き入れて下されば、荷物の中継地として利用ができる。収入の助けにもなり、だんだんと人家もできてくる。と、畑の場の開発の必要性を訴えている。

すでに、湯山間道が違法であるとされているにもかかわらず、領主に六甲越えの許可を、開発によ

る益を訴えれば得られると思っていた。これは、自分たちの開発や六甲越えの通行が不法だと思っていないためのものなのか、知っていて、開発という名の陰に六甲越えの交通を行うためのものなのか意見が分れるところだが、文中に、開発によつて荷物の往来が増えてくる、と書いてあるところを見ると、前者であろう。

なお、この史料は、「本山村誌史料編」一六六・一六七頁の史料七十四号と同じ内容で、中野村の庄屋の四郎右衛門が、

「他之庄より右新開畑之願書年、御座候故寫取置申候」

と、書き写したとしている。従来この七十四号史料は、明治以降の史料とされていたが、「本庄村史資料第二巻」の編集の過程で、文化二年のものと同分かつた。

これに対し尼崎藩が、どんな対応をしたのかの史料は見つかっていない。しかし、文化二年閏八月二十四日、森村など四ヶ村の庄屋が改めて、次のような願書を差し出した。

「字畑之場新開起之儀御願奉申上候処、此節外村々差支無之哉と御尋御座候二付、庄内相互ニ掛合も仕候得共、今少々熟談難行届候二付、爰暫之間何卒御猶予被為成下候」

つまり、開発願書を出したが、藩から「外の村の支障はないか」と尋ねられたので、本庄九ヶ村で話し合ったところ、もう少し時間があるので待つて欲しいというのである。これから考えると、尼崎藩は、他の村からの反対がなければ開発を認める可能性があった。しかし、話し合いがすんなり運ばなかった

ことからして、他村からクレームがついたのではあるまいか。

また、この畑の場の開発をめぐることは、同年、北畑村の助左衛門・七兵衛の二人が、六甲越えの道を正規の有馬道にしようと、本庄九ヶ村の合意を得て一軒に一人の人手を出して道筋を整備した。出来たところで今度は、北畑村と田辺村が、畑の場の開発を計画、山路庄田中村の彦右衛門に、

「本庄山之内畑の場と申処開発致、有馬通諸荷物次場に致度、又は右場所追々開発致度旨有之候哉」

と、掛合つたが、残る本庄七ヶ村にこの話が伝わり、反対論がでて、同年十一月、本庄九ヶ村からとして大坂町奉行所と尼崎藩に願書を出すことになった。他の本庄の村々が北畑と田辺の畑の場開発の抜け駆けを許さなかったのである。

また、しかも

「他之庄より右之場所相願候而は、猶々差支候故急々書付相認メ」

としており、他庄の動きに神経をとがらせている。後に、住吉道との合流点になる本庄橋付近の前までは、この畑の場が湯山間道にとつて、重要な地点になっていたと言えるだろう。

五、その後、幕末までの紛争

こうした畑の場の開発の動きに対し、翌文化三年（一八〇六）になると、小浜・伊丹・生瀬・尼崎の宿駅商人たちが、湯山間道について湯山町と本庄九ヶ村を相手どり、新規の道を切り広げるのをやめてほしい、と訴えた。この時の争論の内容は、田辺氏

の論文や、「本庄村史資料第二巻」にくわしいが、
だいたいの内容は次の通りである。

宿駅側の訴えは、

○柴草を運ぶ細い道を、偽って大幅に修復した。また、道標までつけている。

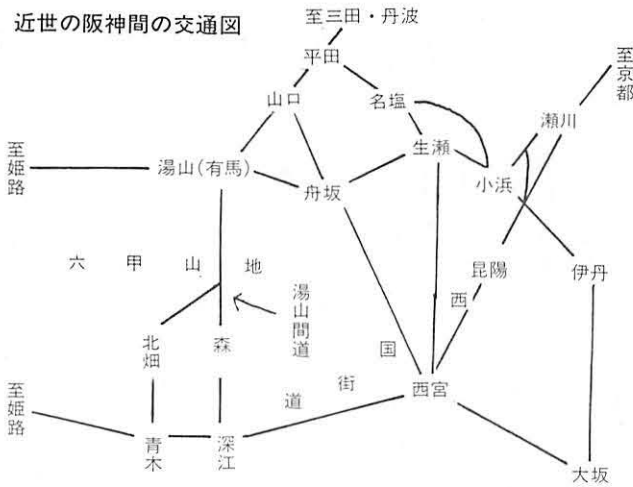
○湯山―灘の間を、牛が荷物を積んで行き来した。

○間道利用が続くと、宿駅の公用通行の役目にも支障をきたす。

などである。これに対して本庄側の回答は、

○この道は以前からあったもので、新道ではない。
天皇が御幸したこともある古道である。

近世の阪神間の交通図



○山仕事や石宝殿の参詣に道を利用することはあっても、宿駅の差し支えになるような荷物の往来はしていない。

などである。この論争は、宿駅側が譲歩した形で、灰色のまま決着した。

中途半端だっただけに、その後も安政六年（一八一八）

五九）・文久二年（一八六二）に紛争が起きている。文久年間には、それぞれが領主を担ぎ出してくるようになっていた。年貢米の通路として、六甲越え道

を利用しようとしたのである。

こうして、幕末まで論争は続いたのである。

〔注〕

①この論争については、八木哲造「近世の宿駅争論」

〔近代〕第七号 神戸大学所収〕に詳しい。

②本庄村史資料第二巻一五頁〔27 街道荷継場

開発願書〕

③④同右

⑤本庄村史資料第二巻一三頁〔26 街道荷継場

開発につき返答猶予の願書〕

⑥本庄村史資料第二巻一八頁〔28 街道荷継場

開発につき覚書〕

⑦同右

▼毎日新聞 9・17

ニューシランの国立日本研究センター初代研究官になった高校教諭
田辺 真人さん
たなべ まさと

神戸市出身。46年開学大文学部卒。兵庫県立芦屋高等学校に55年間御影高等学校教諭。先月末退職。妻さんと長男（つね宏）39歳。

ニューシラン
と話を切り出し
たら、三分の二の人
は、ああ、ジャン
ルの……。ニュー
ギニアと間違っ
ず」と笑う。

それは、日本に
とってはまた関心度の低い国だ
が、あちらの日本への関心が高い。
貿易の主要相手国であり、観光客
でも実はオーストラリア、米国に
次ぎのが日本人年間約七万人。
観光立国を許せるこの国では、大切
なお客さんであり、中、高生の百
人に一人以上は日本語習い、国
立大六校中四校は日本語科が設



けられている。

日本研究センターは、その国立
大で初めて日本文化、日本文学な
どの講座を開いたマッサー大学に
今年一月、設置された。いまど
ころた一人のスタッフ。今年二
十日離日。家族と現地入りし、

ス、ニューシラン人の日本語
教員対象の研修講座開設の任
事が待っている。

三年間の契約ですが、両国の
研究者や学校の交流に力を入れ、
日本人が使う生活用品、おもちゃ
などの展示場を借りたい。国を理
解するとは、人と生き方を理解す
ることです。」

三年前の夏休み、社員の教諭
の教育研修旅行で二週間ニューシ
ランドを訪ねたところになった。

「豊かな自然、親切ではにかみ屋
の人々。かつての日本に出会うま
した。昨年文部省派遣教員と
して、家族とともに赴任。国立通
信教育学校で一年間、日本語を教
えた。本業以外に、得意な英
語でラジオや市民講座で専門の日
本史や日本文化について話した積
極性と誠実な情を見込まれ、今
度の大役となった。

「生徒たちに夢を持ってと言っ
てきた。その手前、私も夢を持って
生きます。」（吉井 秀一）

田辺真人氏は、県立御影高校を退職し、9月20日
ニュージールランド国立マッサー大学専任講師兼日
本文化センター研究官として赴任しました。史料館
の館長は辞任しましたが、理事として止どまります。
なお、後任の館長は当面置かず、大國正美研究員
が、史料館理事兼館長職務代行となりました。

- 6 -

神戸の田辺さん

NZで日本文化普及

教師辞め、来月家族と移住

ニュージーランドに移住する田辺眞人さん一家。神戸市生田文化会館の送別式で、22日



仕事は現地大学の専任講師兼研究官

ニュージーランドの文化発展に新たな一歩を踏み出す。兵庫県立影響社会科教師の田辺眞人さん。神戸市東灘区在住の田辺さんが、ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。

ニュージーランド「日本研究員」に

国立大講師で

ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。

御影高・田辺教諭 派遣時の活躍買う

田辺眞人さん(ニュージーランド)のかかわりは、三年前の夏、兵庫県の教育振興課の職員として、一週間の訪問を始めたのがきっかけ。その時は特別な関心を持たなかったが、六十日に神戸で開かれた「ニュージーランドで開かれた」大会で、田辺さんと知り合った。田辺さんは、ニュージーランドで開かれた「ニュージーランドで開かれた」大会で、田辺さんと知り合った。田辺さんは、ニュージーランドで開かれた「ニュージーランドで開かれた」大会で、田辺さんと知り合った。



ニュージーランドの日本研究センター研究員になる田辺さん。神戸市東灘区在住の自撮り写真

ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。

神戸新聞 8・21

ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。

毎日新聞 8・26



一家あけてNZの大学へ赴任。教える子、史学仲間が送別会

ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。

新たな友好の架け橋に

田辺前館長、マツスイ大学へ赴任

ニュージーランドに日本研究センター

ニュージーランドの国立大学に新設される「日本研究センター」研究員に決まり、九月に赴任する。滋賀省が昨年、ニュージーランド教育省の日本教師として派遣され、今年春帰国したばかりだが、現地で「日本教育にどう進むか、特に日本文化の紹介に努める田辺さん」は、大々的移住者が「タボラ」。「たまたまはし」と願う田辺さんの熱い思いは、一歩を踏み出した。



田辺眞人さん

神戸女子薬科大学構内古墳

史料館研究員 藤川祐作

魚屋道の起点付近にあたる神戸市東部、芦屋市との境から住吉川間には、かつて、森・中野・岡本三グループの古墳群が知られていたが、今日では、今回紹介する森の神戸女子薬科大学構内古墳(通称生駒古墳)のみが現存するだけである。なお、昭和四十八年(一九七三)に、神戸大学考古学研究会の手によって墳丘石室の測量調査がおこなわれている。

又、同古墳出土と伝えられる遺物が同大学に保管されており、昭和三十九年(一九六四)十二月に、同構内薬草園造成のおり出土した銅鐸調査と平行して、実測と観察が尼崎貞子女史と村川行弘氏によっておこなわれた。

以下、尼崎・村川報告と昭和五十六年(一九八一)発行の神大考古研概要をもとに述べてみる。

外形はすでに、自然、人為的にかなり封土がうしなわれているが、直径一七呎前後の円墳と考えられている。(第1図)。

内部は、南向きに開口する無袖式(長方形)の横穴式石室で、奥壁・天井石・側石共に良好に残っている。使用石材は、花崗岩と石英粗岩が五分五分で使われているようである。

さて遺物についてであるが、尼崎・村川報告では、完形品破片などを合せ二三点があったようであるが、神大報告では、須恵器七点・銅鏡一点・甍片若干・

鉄器数点となっている。なお、尼崎・村川報告には、鉄器についての報告はない。かなりの遺物が、何らかの理由で紛失しているようである。これを機に、史料館へ寄託展示の方向で考えてみたい。

須恵器(1~12)

坏蓋(1~6)

1・2・3・4・6は口縁部外縁は丸味をおび、1・2・4・6は内縁は浅く、4・6はかたちのよい宝珠つまみで、2・4以外は焼成良。

坏身(7~10)

7は内側へ弯曲した口縁部をもち、8・9・10は丸味のある口縁部で、7のみが焼成良。

高坏脚部(11)

脚に二本の沈線があり、内部に手ひねりのあとをのこし、皿部と脚は別つくりで、接合したあとをのこす。焼成良。

長頸壺(12)

丸味のあるV状の口縁部で、頸部に二条の沈線をもち、胴部の張りは上部はやや直線的で下部は丸味をもつ。胴張部に二条の沈線、その間にへら状斜行圧痕文、底部は丸底に近い。口頸部と胴部は別つくり。焼成良。

青銅鏡(13)

高さ三・四^{センチ}・口縁径八・〇^{センチ}・底径四・二^{センチ}を

計り、口縁部は外へ朝顔形に広がる。以上が遺物についてである。

古墳のつくられた時期は、石室の形態、須恵器から六世紀末から七世紀前半と考えられ、銅鏡は後代にもちこまれたもので、古代以降のものと思われる。最後に神戸大学考古学研究会には、同墳が神戸市域の六甲南麓で残る唯一の横穴石室であることから、一日も早い本報告書の発行を切望するものである。なお、古川久雄学友には、図作成で手をわずらわせた。記して感謝にかえる。

付記

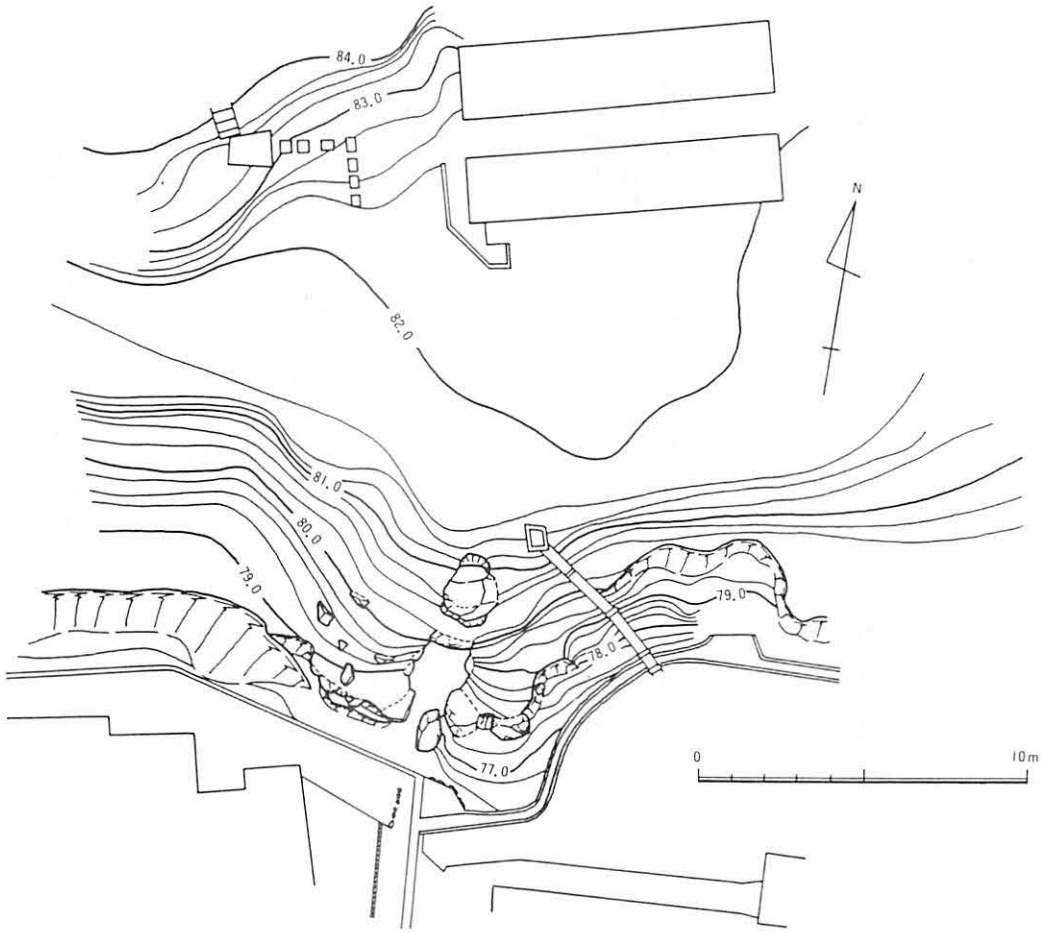
初稿校正中に鉄器の実測図が提供されたが、紙面の都合と須恵器の実測図が一部不足しているようので、次号に合せて補足報告をしたい。

本庄村史資料編 第二卷

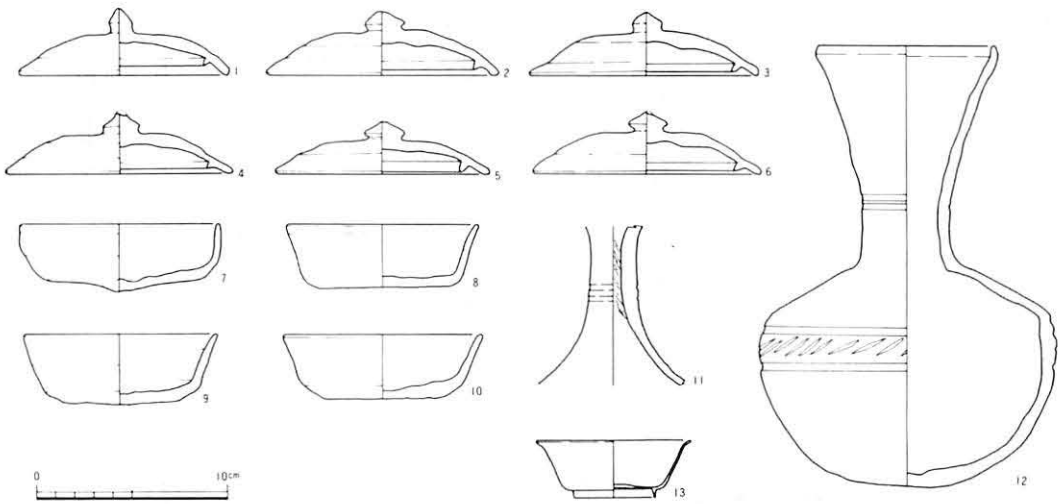
近世農政・民政史料

神戸深江生活文化史料館では、五十五年から、本庄村史の編纂を始めています。神戸市東灘区を構成する御影、住吉、魚崎、本山、本庄のうち、本庄村史だけが、久しく待望されながら未刊でした。本巻では、魚屋道の新出史料を始め、法令、年貢、村政、山論、夫役など六項目三十三点の史料が収録されています。史料だけでなく、最新の学界の成果を取り入れた分かり易い解説があり、気軽に読めます。A5判、百五十頁。

友の会会員 八百円、一般 千円。



第1図 神戸女子薬科大学構内古墳 地形実測図



第2図 出土遺物(1~12須恵器・13青銅碗)

夏の特別展 戦時下の生活文化史を企画して

史料館調査員 望月友二

一、はじめに

本年度の特別展第二弾として、今夏『戦時下の生活文化史』を開催した。戦時下の国民の苦しかった生活を知り、また思い起こして、忘れ去られようとしている戦争の悲劇を今一度考え直し、若い世代の人達にも理解してもらおうというねらいだった。

特に『戦時下の生活文化史』という事で、戦時中人々はどのような生活を営んでいたか、という点に着目し、生活文化という面からアプローチしているのが特徴である。

展示したのは史料館の所蔵品約三十点、そして西宮市立郷土資料館の御好意によりお借りした、鉄カブトなどの戦争資料十一点、芦屋市教育委員会所蔵の空襲直後の深江近辺の写真数点である。期間は八月十五日の終戦記念日をはさんだ、八月一日から九月二十七日までの二ヶ月間。史料館三階のクリオ・ルームを会場にした。

二、展示品について

展示品は、戦時下に人々はどうのどのような生活を送っていたかをテーマにしているため、特に生活に関する資料を数多く展示した。

衣料切符や国民服・モンペなどは、当時物資の不足により、衣類に厳しい統制が行なわれた事がよくわかる。また人々は生活をしていく上で、あらゆる

面で戦争の影響を受けた。愛国百人一首絵ハガキや戦意を高揚させるレコードなど、娯楽や文化の領域にまで、戦争色が色濃く浸透している。

また、ガレキの山と化した空襲直後の深江近辺の貴重な写真や、昭和五十七年沖繩南部糸満市郊外で掘り出された、沖繩戦の遺品の水筒や切り込み隊員の地下足袋などは、一体、だれのための戦争か、いかに戦争が非人間的な行ないかを、最もよく語りかけてくれた。

この様に今回展示したものは、それぞれが戦争の悲惨さを込めたものばかりで、戦争を知らない世代の私達にも、その当時の生活状況を通じて、改めて戦争とは何かを考え直す機会になった。

この特別展が始まってから、戦争に関する資料を寄贈してくれる方が多くなってきたが、この事から見ても、今回の特別展の狙いは、ある程度達成できたのではないかと思っている。

三、戦時下の生活の思い出

今回の『戦時下の生活文化史』の展示とは別に、史料館友の会の戦争体験者、そして特別展を見学にこられた方々に、戦時下の生活の思い出という、アンケートをお願ひした。その当時の人々の苦しかった生活、私達若い世代には、想像もつかない生活が繰り広げられた事などを中心に、『戦時下の生活文化

史・展示品解説』の第三部に抄録したが、今後こうした体験談の蓄積が必要である。

四、おわりに

八月から九月末までの二ヶ月間、暑いさなかにわたって開催された特別展だが、その間、新聞、テレビなどで特別展の事を知られた方など、その他大勢の人々が見学に来られた。改めて反響の大きさに驚くとともに、この特別展を開いたことの重要性を感じている。

最初特別展を開く前、私達戦争を知らない若いスタッフが、戦争展という企画を行なっても、はたして本当に当時の人々の苦しみというものが正しく理解でき、そして見学に来られる人達に伝わるだろうか、という危惧があった。しかし見学にこられた多くの人々やアンケートの内容を見るうちに、いらざる心配だった、と安心するとともに、充実して継続していかなければならないと、責任も感じている。

私達は、この特別展を企画した時から、一回限りで終わらせないことを申し合わせた。続けることが大切だと思うからである。また、特別展の期間中だけ、戦争のことを考えればよいというものでもない。当面、長期的に取り組みたいのは、戦争体験、戦時下の生活体験の聞き取りと掘り起こしである。同じ歴史事象でも、体験した人の境遇で異なるため、さまざまな世代の方から、聞き取りを行ない戦時下の生活史を多角的に記録していきたいと思う。今後も、資料の提供や聞き取り調査への参加など、ご協力、よろしくお願ひします。

平和の大切さ かみしめて

——花園大・望月さんら5人が企画

戦時下の資料展示

東灘 若者に悲惨さを伝える

戦後四十二年。風化しつつある戦時の悲惨さをいまだに考え直してみよう、戦時下の生活に関する身近な資料を集めた「戦時下の生活文化史」(神戸深江生活文化資料館)が東灘区深江本町の同資料館三階で開催されている。

この特別展は同館の運営に携わっている花園大学四回生、望月友三さんと同大生、高校生、五人が企画。戦時の悲惨さを生々しく伝え、史を明らかにしようと、我々若者世代にも二度と同じ過

ぎやレコトなど、四十二年の歳月が史料を着色させているが、戦争の色濃く染み付いた当時の生活風景が生々しく見えてくる。「ビルマで戦死したと聞知したため死を認定」と書かれた茶色くぼろぼろになった一枚の戦死公報を見ながら、同館の学生たちも「戦争の犠牲になった人々やその家族のやりきれなさが思い浮かびます」と語っている。同展は九月二十七日まで、毎週土、日曜日に開かれている。



若者の来館者の多い「戦時下の生活文化史展」

新聞にみる

史料館

戦争の悲劇 今一度考え直そう

▲毎日新聞 8・13

苦しい当時の生活しのぶ

「戦時下の生活文化史」展

神戸深江生活文化資料館

期間中販売したパンフレット(百五十円)は、史料館で常時発売しています。戦争を語りつくす特別展は今後も続けます。体験などをお寄せ下さい。

戦後の国民の苦しかった生活を知り、または思い起こして、忘れられようとしている戦争の形跡を今一度考え直そうと、東灘区にある町の史料館で一日から戦時下の生活に関する資料を集めたさびやかな戦争展「戦時下の生活文化史」が始まった。



防ぎずきんや国民服など、戦時中の生活が展示された「戦時下の生活文化史」展。東灘区の神戸深江生活文化資料館で。

国民服や戦死公報など貴重な資料60点

同展を企画しているのは神戸深江生活文化資料館(東灘区深江本町三)。同館は県立御影高校の田辺真人教諭(同館館長)が古書などに興味のある大学生や高校生が集まって五十六年二月に「まちぞくらしの歴史」が学べる史料館としてオープン。月一回の研究会のほか、史料館だよりを年一回発行、同区の貴重な史料が展示されている。同展は、戦争を知らない子供たちが戦争の悲惨さを知り、当時の生活を通して、風化しつつある「戦争」を今一度考え直し、平和をかなしめよう、と同館で初めて戦争展を企画。内地で苦勞を重ねた国民の生活にスポットが当てられている。

神戸新聞 8・2

室内には同館の所蔵品をはじめ、西宮市立郷土資料館などから協力を得た貴重な資料が約六十点。軍服をつくり住立てられたカーキ色の国民服や突撃靴となるのを防ぐための電灯カバー、国民の戦意を高揚させるための絵はが

◆史料館友の会の主催する「魚屋道を歩く会」が五周年を迎えました。六甲山最高峰を横断する十二キロのコースで、日頃運動不足の小生などにとっては相当こたえる運動量です。しかし、毎年百人前後の方がご参加下さり、しっかりと定着してきたように思います◆各新聞や本紙で紹介された通り、田辺眞人氏が館長を辞任してニュージラランドへ飛び立ちました。田辺氏の名ガイドを楽しみに参加していた方には、まことに申し訳ない。参加者が多過ぎて、途中で解説することもできないので、今回は、魚屋道を集集し、コースガイドも加えました。歩きながら読み、また思い出して読んでもらえたら幸いです◆田辺氏の離日もさることながら、史料館に集っている仲間が、進学、就職などの転機を迎えています。このままでは、史料館の運営がたち行かなくなる心配も出てきました。どうか、有償ボランティアという形で協力していただける方がありましたら、ご一報下さい◆私たちが、この史料館運動に携っている理由はいくつかあります。大上段にふりかぶっている理由は、地域文化の振興ということ。しかし、大切なことは、私たちはやらされているのではないということ。いかなれば、自らの存在の証しとして作業を重ねているわけで、その意味では自分のための運動である、ともいえます◆ここに集う人たちが、仲間づくりを通して個性を豊かにし、自らを磨く自由な場にしたい、というのが、私の唯一の願いです◆町角にある市民手作りの博物館。一人一人のともす明かりはささやかですが、二本、三本と集めることで、大きな炎にしたいのです。

資料寄贈者ご芳名 (七)

昭和62年3月以降
敬称略

大日神社奉賛会・どん／大塚康弘・神戸市カルタ／泉寿賀子・徳利、箱枕他38点／尾形勉・さおばかり他2点／清水裕之・航空写真51枚／村上廣治・大日本傷痍軍人会活動記録／若林伸和・軍隊手帳他11点／西村重雄・鉄カブト／今林澄子・年賀電報／大國正美・書籍／望月浩・書籍／尼崎市立地域研究史料館・書籍／金田談・書籍／田辺眞人・書籍／西宮郷土資料館・書籍／兵庫県博物館協会・書籍

研修会への館員派遣

S62. 4. 25

兵庫県博物館協会第21回総会・研修会
創立20周年記念表彰・昭和62年度総会
見学 特別展『華ひらく大名文化 徳川美術館の名宝』
講演 『大名とその道具』
徳川美術館・館長 徳川義宣氏
(派遣館員 調査員 道谷卓)

史料館日誌抄

史料館主事 川口さつき

S62年

- 3月1日 春の特別展『郷土玩具に見る生活文化史』(5月31日まで)
- 4月19日 友の会 第39回例会(参加者 87名)
史料館開設6周年記念・友の会総会
- 25日 東灘小学校6年生(見学者 34名)
本庄中学校2年生(見学者 42名)
- 5月2日 東灘なんでもまつり協賛
『深江北町遺跡展』(6月14日まで)
- 8月 東灘小学校6年生(見学者 220名)
- 9日 福池小学校6年生(見学者 147名)
- 24日 友の会 第40回例会(参加者 110名)
バスツアー『吉備路の旅』
- 6月28日 友の会 第41回例会(参加者 34名)
神戸開港120周年記念講演会
「敏馬、大輪田の泊から兵庫の津へ」 田辺眞人氏
「生きた近代建築博物館 神戸」 嶋田勝次氏
- 7月15日 大阪信愛女子短期大学(見学者 47名)
- 19日 友の会 第42回例会(参加者 53名)
バスツアー『小京都 出石と銀山生野の旅』
- 8月1日 夏の特別展『戦時下の生活文化史』(9月27日まで)
- 3日 花園大学民俗学ゼミ4回生(見学者 15名)
- 9月13日 神戸史学会研究例会(参加者 36名)
「敏馬神社について」 落合重信氏
「検証・坂本龍馬の書状」 土居晴夫氏

協力団体		史料館員・役員	
神戸市教育委員会	東灘区役所	理事 太田垣正雄	大國 正美
芦屋市教育委員会	神戸史学会	小嶋 悦郎	坂上和三郎
国立神戸商船大学	武陽史学会	志井 保治	志井 正夫
神戸市立森林植物園	本庄五校園	磯辺 信三	杉浦 昭典
明石市立天文科学館	サンテレビ	大塚 康弘	田辺 眞人
神戸華橋歴史博物館	大丸百貨店	藤川 祐作	深山 健二
民家博物館四国村	神戸共同印刷	望月 浩	川口さつき
日本玩具博物館	御影高校地歴部	大國 正美	伊東 玲子
深江青少年協議会	神戸市観光課	西村 敦	田部美知雄
深江ショッピングセンター		松本 義宣	松本 義宣
		調査員 道谷卓	柏原 正民
		友の会幹事 志井 保治	望月 友二
		門前 喜康	小嶋 悦郎
		磯辺 信三	寺岡 一夫
		大川 浩弘	(以上常任)
		佐野 未夫	吉川 永子
		清水 久雄	佐野 未夫
		田辺 かり	田辺 かり
		兵藤 光	兵藤 光